

「反対語とネガティブ思考で 「自ら考え、学ぶ力」を高める

**建前をしっかり持てば
本音は通ずる**

三球電機の社員は「教えられる」のではなく、自ら考え「学ぶ」ことが常に求められている。それは、笠原建二社長の謎解きに答えなければならぬからだ。

「当たり前前の反対語は何だ？」

「安全管理という言葉の意味は辞書に何と書いてあるか？」

読者にも考えていただきたいが、まずは笠原社長に答えを聞いてみよう。「当たり前前の反対は、ありえない。つまり、『有り難し』です。人は当たり前前と思えば不満がたまり、有り難しと思えば感謝になる」

ちなみに、安全管理の正解は「辞書には載っていない」。なぜなら安全は管理する必要がないからだ。正しくは「危険管理」または「危機管理」である。なにも言葉遊びやとんち話をしよう

というわけではない。笠原社長は反対語を考えることで、その言葉が持つ真の意味や背景にある重要なことに気づくように絶えず社員を啓発している。例えば、利益の反対語は損失。利益

を追えば顧客は逃げていくが、顧客の損失を防ぐために考え提案すれば、顧客とウイン・ウインの関係になれる。笠原社長はこうした気づきを得るためのスローガンを30年間毎月考え、朝

礼では唱和している。例えば、「益を追えばお客が逃げる 害を追えば仲間が増える」「建前をしっかり持てば本音は通ずる」等々(図表)。

笠原社長によれば、建前の語源は家を建てる前の土台を指し、世の中のために重要なのが建前、本音は自分のためにあるとのこと。つまり、建前があつてこそ本音も通じるという意味だ。

**信号機を24時間365日
守り続ける専門会社**

三球電機は、信号機や道路の電光掲示板など交通情報設備の調査・設計・施工・保守専門会社である。道路照明や通信設備も請け負っている。取引先は、国土交通省、警察庁、警視庁、消防署、各自治体などの官公庁が多い。

特に信号機という交通インフラの要とも言える装置の交換や修理、メンテナンスにはノウハウが必要で、同社は信号機を停電させることなく切り替え



30年前にスタートした「安全衛生発表会」は、同社社員と取引先で毎回大入り。発表内容からは、笠原社長の哲学が一人ひとりの社員に浸透していることがうかがえる (提供=三球電機)

主な事業内容：

交通情報設備・通信設備・電気設備の調査・設計・施工・保守など

本社所在地：東京都練馬区

社長：笠原建二

社 資 本 金：9000万円

創 業：1961年

従 業 員 数：300名(嘱託を含む)

会 社 H P：

<http://www.sankyu-denki.co.jp/>



笠原建二社長

「人まかせ企業」は今日で卒業！ 社員をヤル気にさせる「自分ゴト化」のススメ

2017年度の主な月間スローガン

仲間には「頼る」もよし 「頼られる」は更によし
(量と質の関係を整理し、頼られる企業となる)

問題は「解く」もよし 「見つける」は更によし
(問題にすれば改善できる)

問題は排除するより取り込む事に価値がある
(プロセスネガティブ、結果ポジティブ)

失敗は宝！ 成功は反省出来ない 失敗は反省出来る
(反省の繰り返しに価値がある)

月間スローガンはすべて笠原社長が考案。「考える力を高めるためには不可欠」と社長がいう「反対語」によって構成されている(笠原社長提供資料から編集部作成)

る技術を持っている。

同社は都内の信号機がある交差点と、それに付随する交通情報設備のメンテナンスを担当している。速やかに修理するためには24時間365日体制で、休日や夜間には常に7人の社員が待機している。

「業務上必要な器具や装置も自社で開発していますが、そこまでやっている同業は他にありません」と笠原社長。

同社は笠原社長の父、太郎氏が1961年に創業した。

先代は「我等の誓」という7節からなる社訓を作り、第1節に「我等は雄大な希望のもとに、着実なる実践力

を養い、総てに感謝することを創業の精神とする」と記した。この感謝の精神から「サンキュー」＝「三球」という社名になった。

笠原社長は69年に入社し、自ら無線機オタクというほど製作にのめり込んだ知識を生かし、新入社員達に技術知識を教えた。

「自分で言うのもなんですが、教えることが得意で、普通2〜3年かかるのを数ヶ月で教えちゃうんです。『あなたが分からないことを教えてほしい』という聞き方で、その人の足りないところを把握して集中的にトレーニングする。ところが、これが悪かった。一通りの知識を得るとみんな辞めて別の会社に行ってしまう。高卒が中心ですが、一時は20〜25人を採用しても半年が1年のうちに去っていきました」

社会に貢献する 創造の泉となろう

90年に社長に就任したが、当時は借金漬けでいくら受注が増えても利益が出ない財務状況だった。組織としてのまとまりもなく、モチベーションも低かった。

笠原社長は社員から会社への不満や要求を出してもらい、できることは必ず実行すると約束した。社訓に加えて経営理念を作り、「社会に貢献する創造の泉となろう」と定めた。社会のた

め、顧客のために役立たなければ会社をつぶしてもいいという覚悟だった。

外部に依頼して管理職研修を始め、社員全員で仕事に対する姿勢や顧客への貢献などを考えた。休日や給料も増やして一時的に財務状況は悪化したのが、翌年には利益が増えた。笠原社長は驚き、会社の主役は社員であり、能力開発がなにより大切だと気づいた。

「教える人と人が辞める。それなら、教えないで社員自身が学ぶようになるにはどうしたらいいかと考えるようになりました。自分で興味を持ち、自分で勉強するように、会社や社員に課題や問題を投げかけるようにしたので」

それが反対語などを使って自分で考える力を養うロジカルシンキング訓練だ。しかし、各社員がどのような問題や課題を抱えているのか知らなければ心に響くような言葉にならない。そのため、笠原社長は社員と話し、敢えてその人が気にしていることを投げかけたりした。

ある社員は酒飲みで酔うとすぐにけんかする、手のつけられない悪癖があった。笠原社長は彼と話すうちに数学が苦手なのがコンプレックスだと分かった。そこで、基本的なことを1週間みっちり教えると、他の社員よりもできるようになった。

以降、彼は自宅で自発的に勉強するようになり、家族との仲もよくなり、

からみ酒の癖もなくなった。

「私自身も酒が飲めないことがコンプレックスで、最初は黙っていたんですが、あるとき飲めないと宣言したんです。そうしたら、誰とも話せるようになりました。それまでは人前で話すのが嫌いだったんですよ。欠点やできないこと、つまりネガティブなことをオープンにすると、それが逆に武器になるんです」

同社では30年前から年1回、「安全衛生発表会」を関東と九州で開催している。取引先なども呼び、700人も集まる人気イベントになっている。

笠原社長の提示したテーマに沿って3人の社員が発表するが、内容が刺激的で面白いと評判だ。2017年度は「質と量」、16年度は「本音と建前」がテーマだった。08年度は「ネガティブ思考」だったが、1人の社員が「危機、失敗、問題といったネガティブな言葉を大事にした方が危機管理につながる」と実例を挙げながら発表した。

「実行するとネガティブな障害や問題が必ず出てくる。これを排除することなく、正面から取り組めば結果はポジティブなものになる。ネガティブ思考は考える力をつける上で重要です」

一見、あまのじゃくに思える笠原社長の言葉が行き着く先は「自分の頭で考える」ことだ。常に自分のこととして考えることで人は成長するようだ。